

氏名	猪瀬昌延
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第299号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉陽炎 〈論文〉彫塑制作におけるミメーシスの循環とその人間形成的意義
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 本郷 寛
（論文第1副査）	〃 准教授（〃） 小松 佳代子
（作品第1副査）	〃 教授（〃） 木津 文哉
（副査）	〃 〃（〃） 北郷 悟

（論文内容の要旨）

私は彫塑による作品制作を行っている。彫塑制作で用いられる粘土は、イメージを実在化させる制作行為において、そこで起こる精神的変容を的確に捉えることのできる素材として適している。

私は自身の制作の中で現実世界にいる私から開放される感覚と、制作過程で変化していく私の双方を感じる。そして変化していく私は制作が続けられていく中でさらに開放される感覚を得る。この開放感と変化していく私を感じることで制作の中で繰り返され、一連の流れが作られているように感じている。開放から変化へと繰り返される流れは、その過程において新たな自己との出会いを可能にし、制作という身体行為を通して現実世界にいる「自己への気づき」を体感することを可能にする。別な言い方をすると、一連の流れは制作行為によって自己を作品として表出し、表出されたものから「自己への気づき」を得ることである。そして「気づき」を得た自己は新たな発見や出会いを受容することでさらに新たな自己を導き出すという形で進化していく。

私は制作プロセスにおけるこのような循環する流れと自己への気づきが現代社会において大切であると考えている。現在私たちの生活では多くの情報や多くの物質など既存のものから選択をすることが個性の主張であると考えられ、そうした情報の蓄積によって自己確立が可能であるかのように考えられている。また多くの情報獲得や物質的な豊かさや時間の短縮化に偏った価値観を求めているように思われる。しかし本当の意味で豊かさを感じることや多くの情報の中から自らが必要とする情報を見極め、自らの意思よりの的確な決断をする為には己を知ることが大切ではないか。己を知り自己を認識することは、自己を外界に表出し表出された自己を享受することで可能になると考えられる。この表出と享受の関係は作品制作行為において繰り返し行われていることである。そこで彫塑制作における開放と変化を繰り返す時間的経験は自己同一性の確立を促し、人間形成の一端を担う可能性があるのではないかと考えるようになった。

このようなことから本論文では制作者の自己変容を可能にするものとして彫塑制作行為を捉え、その人間形成的意義を明らかにすることを目的とした。制作行為は制作者の内的イメージの再現操作と捉えることができることからミメーシスの循環論を考察することが必要だと考えた。

第1章では自身の彫塑制作経験に基づき、制作で扱う素材と「作られるもの」としてのイメージの想起、さらに制作者・モデル・作品によって作られる場の関係から彫塑制作過程において制作者の精神的変容を導き出す可能性について考察を行った。

彫塑制作で用いられる粘土は石材や木材に比べて素材が形成するまでの時間観と素材のもつ力強さの

弱いニュートラルなものであり、受け入れる力と拒否する力の均衡が保たれた状態としての素材である。そこから粘土における時間観は「今」であると見出した。このような粘土の特質と、さらに粘土の持つ「今」の時間観が制作者において障害がなく自己の表出を可能にするのである。この意味において彫塑制作に用いられる粘土は制作者の自己の広がりをも可能にし、現実世界と制作者の精神世界を繋げるものであると言える。また、粘土のニュートラルな特質は長時間に及ぶ制作過程で起こる制作者の精神的変容を導き出し、自己を克明に写取ることを可能にしているものであることを明らかにした。

第2章では一般に「模倣」と訳されるミメーシスを模写や再現としてではなく、創造的模倣として理解するためにミメーシスの概念史を理解した上で、ポール・リクールのミメーシス論を彫塑制作との関係から考察した。ミメーシスは制作行為において内的イメージを現実化する活動と作品を受容する活動に関わり、作品制作行為における活動性であることを明らかにした。さらに彫塑制作プロセスに即してミメーシスの働きを考察し彫塑制作におけるミメーシスの循環を検証した。

第3章ではその作品に生命感を感じることができ、作者の反省的自己理解としてその制作行為を捉えることのできる木内克と柳原義達の作品と制作過程について考察をした。木内と柳原はともに塑造による優れた作品を制作し、近代日本の彫刻界に大きな影響を与えた作家である。木内と柳原の作品制作過程の中でも自己の変容を顕著に読み取ることのできる、木内のテラコッタによる手びねりと柳原のデッサンを中心に検証した。

第4章においては、ミメーシスの循環はミュトスと対になることでその意味を発揮するというリクールの理論に再び依拠しながら、彫塑制作におけるミメーシスとミュトスの関係を明らかにした。さらにミメーシスの循環について制作行為において現実世界である日常性と精神世界としての非日常性を循環する時間的経験であると捉え、民俗学的循環モデルにおける自己変容との類似性から考察した。

本論文は美術作品制作の中でも彫塑制作がどのように自己理解を可能にし、更なる成長への変容を導き出すかを検討した。すなわち彫塑制作過程で行われる身体行為は制作者と外界とのあいだを繋げるだけに留まらず、新たな自己発見の連続した循環、もしくは螺旋構造的成長という自己変容の過程であることを明らかにした。その点を見出したことが本論文の到達点である。

(博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、彫塑制作過程において制作者が感じている自己が開放され変容していく感覚を、ポール・リクールのミメーシスの循環論に依拠しながら説明しようとしたものである。特に、制作過程で制作者がもつ時間感覚が、時計時間とは違って過去・現在・未来を記憶・直観・期待として自由にめぐり合わせることが可能になっていること、しかし同時に、作品を完成させるというプロセスにおいては、一定の方向性を持った筋立てが働いていることを、自らの彫塑制作過程と木内克・柳原義達の作品を丁寧に分析することで明らかにしていった。リクールの『時間と物語』は簡単に理解できる理論ではないが、実際の作品制作場面に理論を降り立たせることで、難解な理論を自家薬籠中のものにした点で評価できる。

ミメーシスという言葉は古代ギリシャ時代以来、美術制作理論において使われてきたが、その概念規定は一義的ではない。ミメーシスは単なる模倣ではなく創造的模倣であるとしばしば言われるが、筆者は、W. タタル・ケヴィチの概念史に学びながら、ミメーシスの本来の意味である「内的なものを外化する働き」として捉えることで議論を進めていく。この意味においてミメーシスを理解することで、制作過程は自己と外界との相互作用であることが明らかになる。制作行為は自己の内的イメージの外化であり、作品は外化された自己の表れとなる。それゆえに、リクールの言う、制作の前段階から実制作を経て受容されたものが再び制作の背景となるというミメーシスの循環において、作品の変容が同時に制作者の精神的変容でもあることが見出されるのである。

この変容の過程において、制作者の精神世界で日常の秩序は解体され、記憶と直観と期待が自由に巡りあわされることで創造活動は非日常性を帯びたものとなる。それが作品化されることで再び日常化され、日常は新たな強度ある日常へと組みかえられる。彫塑制作過程において生起している事柄を制作者の自己と外界世界との相互作用として捉え直すこのような議論は、情報化と効率化のなかで人間の存在感が弱められている現代社会に対して、美術制作が持つ重要性をあらためて示すことへつながっていく。本論文は、制作実感を理論によって丁寧に説明し、理論を具体的制作過程に降り立たせることで実感をもって理解しようとした、制作者にとっての理論研究の一つのあり方を示してもいる。こうした点から見て、審査会において課程博士論文として優れたものであることを審査員全員一致で高く評価し、合格と判定した。

(作品審査結果の要旨)

猪瀬昌延は、等身大の2体一組の乾漆作品である。空間に2体の人体像がで構成され共鳴し合う作品「陽炎」、提出論文の「彫塑制作におけるミメシスの循環とその人間形成的意義」で論じられた基本的な制作行為と関連している。作者が制作の中で、自己との出会いがあることによって作品が制作され、現実世界にいる自分自身の開放がなされていくプロセスを造形表現の手段としている。そのような彫塑の自己変容を可能にする制作行為を一つの可能性として捉えている。

作品「陽炎」の塑造における制作過程で、粘土付けとしてのモデリング行為は、ほぼイメージが確定されおおまかな造形として空間に存在させている。その中でやり取りと発見こそが「彫刻」となっていくまでの過程が塑造表現の第1段階である。第2段階としての乾漆の仕事は、フォルムの関係する質の変容として、漆の特性である素材感を超えた表現の密度を高める最も重要な彫刻の仕事となる。また、2点のコスチュームとして表している縦線は、襷としての意味を超え自然界の流れを彷彿とさせながら人間本来の姿(本質)と自然背景を映し出そうとすることで、作者の意図を読み取ることができ、乾漆のもつ独特の呼吸感不思議な湿度とゆっくりとした時間性が表現され、空間全体を作品として機能させることに成功している。

しかし、さらに表現を高めるための可能性として感じることは、「自然」と「人間」を接点とする場合、作者自身がどのような視点で何を訴えようとしているのかを、より深く探ることが重要となってくるのではないと思われる。

猪瀬の表す人間はシンプルである。人体彫刻としても完成度が高く優れている。そして新しい表現としての試みは、大いに評価されるものである。博士提出作品として審査し、合格と判定した。

(総合審査結果の要旨)

猪瀬昌延君は、実技研究として修士課程、博士課程を通して乾漆による人体をテーマとした彫刻実技研究を一貫して続けてきた。また、理論研究として、自らの制作でもある塑造制作の過程において、制作者自身の自己が開放され変容していく感覚について考察し、その人間形成的意義についての研究に取り組んできた。

提出論文では、制作者自身の自己が開放され変容していく感覚についてポール・リクールのみメシスの循環論に依拠しながら説明しようとした。特に、制作過程で制作者がもつ時間感覚が、時計時間とは違って過去・現在・未来を記憶・直観・期待として自由にめぐり合わせることが可能になっていること、しかし同時に、作品を完成させるというプロセスにおいては、一定の方向性を持った筋立てが働いていることを、自らの彫塑制作過程と木内克・柳原義達の作品を丁寧に分析することで明らかにしようとしている。そしてまた、この変容の過程において、制作者の精神世界で日常の秩序は解体され、記憶

と直観と期待が自由に巡りあわされることで創造活動は非日常性を帯びたものとなり、それが作品化されることで再び日常化され、日常は新たな強度ある日常へと組みかえられる。彫塑制作過程において生起している事柄を制作者の自己と外界世界との相互作用として捉え直すこのような議論は、情報化と効率化の中で人間の存在感が弱められている現代社会に対して、美術制作が持つ重要性をあらためて示すことへつながっていく。本論文は、制作実感を理論によって丁寧に説明し、理論を具体的制作過程に降り立たせることで実感をもって理解しようとした、制作者にとっての理論研究の一つのあり方を示している。こうした点から見て、審査会において課程博士論文として優れたものであることを審査員全員一致で高く評価した。

博士審査展提出作品は、等身大の2体一組の乾漆作品である。空間に2体の人体像がで構成され共鳴し合う作品「陽炎」、提出論文の「彫塑制作におけるミメシスの循環とその人間形成的意義」で論じられた基本的な制作行為と関連している。作者が制作の中で、自己との出会いがあることによって作品が制作され、現実世界にいる自分自身の開放がなされていくプロセスを造形表現の手段としている。そのような彫塑の自己変容を可能にする制作行為を一つの可能性として捉えている。

また、2点のコスチュームとして表している縦線は、襲としての意味を超え自然界の流れを彷彿とさせながら人間本来の姿（本質）と自然背景を映し出そうとすることで、作者の意図を読み取ることができ、乾漆のもつ独特の呼吸感は不思議な湿度とゆっくりとした時間性が表現され、空間全体を作品として機能させることに成功している。

審査の過程において、申請者の表す人体彫刻としても完成度が高く優れている。新しい表現の試みは、大いに評価されるものである。そしてこの作品制作のプロセスも含めた独自の世界観を有する作品であり、一見作品上からはくみ取れない地道な手仕事の積み重ねを感じさせ、実技制作研究の成果が認められるとして評価された。

総合審査結果として、本研究の内容は、美術表現を追求する制作者独自の探求の姿勢をもって達成することができたものであり、また、その研究に対する謙虚な姿勢があつてこそその成果であるとされた。そして、提出された論文と作品の関係も加え、一貫した研究の成果が大いに認められるもので、論文、作品共に質の高い優れた研究成果であるとし高く評価し総合的に合格とした。